訓読のための日本語文法

漢文訓読は、「中国文語文」であるところの原文を「日本語の文語文」で読み下してゆくものである。ただし、訓読に用いる語彙と文法は、日本語の中古語(平安鎌倉時代の言語)をもって学習の基準としている「古文」ないしは「文語文」のそれとはやや異なるものである。ここでは、学校で教わる文語文法(便宜的に「和文文法」と呼ぶ)と、訓読に使われる文法(便宜的に「訓読文法」と呼ぶ)のおもな相違を解説する。また、頻用される動詞で、つい現代語の活用で読んでしまう語も取り上げた。

ただし、訓読は時代や流派などによって異なることがあり、この解説と異なる読み方も許されることがある。ここでは、一般的な傾向として顕著な事例を示すものにかぎる。なお、補説には、一歩進んで江戸幕末までの木版本や写本を読み解くための古い訓読法を解説した。高等学校等では、無視してかまわない。

一　動詞の活用

一の一　カ行変格活用

和文文法では「来」の終止形は「く」、カ行変格活用である。つまり、語幹語尾の区別が無く、「こ(未然)・き(連用)・く(終止)・くる(連体)・くれ(已然)・こ・こよ(命令)」と活用する。

訓読では「来」はラ行四段活用の「きたる」を使い、「きたら(未然)・きたり(連用)・きたる(終止)・きたる(連体)・きたれ(已然)・きたれ(命令)」と活用する。

つまり「来(く)る者は拒まず」は和文であり、「来(き)たる者は拒まず」が訓読文である。

例1　沛公旦日従二百余騎一来見二項王一(沛公　旦日　百余騎を従へ、きたりて項王にまみゆ)(史・項羽紀)

補説1　「来ッテ」の送り仮名は、木版本などでは「来テ」とも表記されたので注意。「きて」とは読まない。「不」可ラ」不ル二早カニ自来テ謝セ一(すみやかに自らきたりて謝せざるべからず)」(漢・高帝紀)明暦三年刊『漢書評林』。なお「きたりて」は音便で「きたって」とも読んだ。

命令形は「こよ」ではなく「きたれ」を使う。

例2　取二鶏狗馬之血一来(鶏狗馬の血を取りてきたれ)(史・平原君伝)

他動詞形はサ行四段活用の「きたす」(来させる・従わせる・招く)を使う。

例3　修二文徳一以来レ之(文徳を修めて以てこれをきたす)(晋書・慕容暐伝)

一の二　ナ行変格活用

和文文法では「一な(未然)・一に(連用)・一ぬ(終止)・一ぬる(連体)・一ぬれ(已然)・一ね(命令)」と活用するものに、「し(死)ぬ・い(往・去)ぬ」などがある。

訓読では右の語には「死(シ)す」(自サ変)「往(ゆ)く」(自カ四)「去(さ)る」(自ラ四)を使うのが普通である。「死(シ)す」は漢字音「シ」にサ変動詞「す」がついたもの。「いぬ」の連体形「いぬる」はあまり使われず、次の語と重ねて音読熟語になる。

例4　未レ過十人一三死(未だ過ぎざるに　十人に一三は死すと)(白居易・新豊折臂翁)

例5　寒往則暑来(カンゆけばすなわちショきたる)(易・繫辞下)

例6　去者日以疎(さるものは日にもって疎し)(古詩十九首)

例7　去歳嘉禾生二九穂一(キョサイ　嘉禾　九穂を生ず)(白居易・美天子憂農也)

補説2　江戸時代前期以前の訓読(以下「古訓」という)では「しぬ」「いぬ」も使われた。「未ダレ戦ハザルニ十人ガ一三ハ死ヌ(未だ戦わざるに　十人が一三はしぬ)」(白氏文集・新豊折臂翁)。「去ヌル歳嘉禾生ヒタリ二九穂一(いぬるとし　嘉禾　九穂　生ひたり)」(白氏文集・美天子憂農也)。上例はいずれも神田本『白氏文集』。

一の三　ラ行変格活用

和文文法では「一ら(未然)・一り(連用)・一り(終止)・一る(連体)・一れ(已然)・一れ(命令)」と活用するものに、「あ(有・在)り・を(居・処)り・はべり・いまそかり」などがある。

訓読ではこのうち「あり」「をり」のみが使われる。ただし「をり」は平安時代にはラ変動詞であったが、江戸期からは四段活用の「をる」が普通になったので、訓読では四段活用を使う(終止形「をる」)。

例8　受二上賞一処二尊位一(上賞を受けて尊位にをる)(史・孝文紀)

補説3　古訓ではラ変動詞の「をり」を使う。「受テ二上賞ヲ一処ッ二尊位ニ一(上賞を受けて尊位にをり)(史・孝文紀)延久点

一の四　上一段活用(特に和文と訓読とで異なる常用語のみ)

和文文法では、たとえば「見る」(「み(未然)・み(連用)・みる(終止)・みる(連体)・みれ(已然)・みよ(命令)」)のように活用するもの、ほかに「ひ(乾・干)る」「試みる(のち「試む」上一二段も)」「もち(用)ゐる」などがある。

訓読では「ひ(乾・干)る」は使わず、四段活用の「かわく(乾・干)」を使う。

例9　床頭屋漏無二乾処一(床頭　屋　漏れてかわく処なし)(杜甫・茅屋為秋風所破歌)

「試みる」は、和文ではのちに上二段活用の「試む」も使われるが、訓読では依然として上一段活用の「試みる」が使われる。

例10　試二其弓弩一(そのキュウドをこころみる)(周礼・夏官・薬人)

補説4　「用ゐる」は「ワ行上一段(もちゐる)」が基本であるが、平安中期以降にはハ行上二段(もちふ)も使われた。中世以降にはハ行転呼により(語中・語尾のハ行音がワ行音へと変化)、ワ行上二段にも活用し(もちう)、さらにワ・ヤの混同からヤ行上二段活用(もちゆ)もあった。『春秋左氏伝』荘公三十年の経文「日有レ食ル之ヲ、鼓用二牲于社一」についてみると、明治の訓読である「国訳漢文大成」では「日　これを食するあり　鼓して牲を社にもちゐる(ワ行上一)」と読むが、江戸初期の藤原惺窩点本では「日　食することあり　鼓うって牲を社にもちふ(ハ行上二)」と読み、その弟子である堀杏庵点本では「日　食することあり　鼓うって牲を社にもちゆ(ヤ行上二)」と読んでいる。

一の五　下二段活用と上二段活用・四段活用(現代語との相違)

これらの活用動詞には、文語文法で学習する内容と異なる訓読は多くない(古訓には注意するべきことがあるので補説を参照)。むしろ、現代語の活用で読んでしまうことが少なくない語例を解説する。

ア行下二段の「得」の文語終止形は「える」ではなく、「う」であることに注意が必要。

例11　故布衣皆得二風議一(故にフイ　皆　風議するをう)(塩鉄・刺議)

「出(自動詞)」は口語ダ行下一段「でる」ではなく、文語ダ行下二段「いづ」を使う。「いで(未然)・いで(連用)・いづ(終止)・いづる(連体)・いづれ(已然)・いでよ(命令)」

例12　范増起、出召二項荘一(范増起ち、いでて項荘をめす)(史・項羽紀)

「出(他動詞)」は口語サ行五段「だす」ではなく、文語サ行四段「いだす」を使う。「いださ(未然)・いだし(連用)・いだす(終止)・いだす(連体)・いだせ(已然)・いだせ(命令)」

例13　皆出二酒食一(みな酒食をいだす)(陶潜・桃花源記)

「入(自動詞)」は口語ラ行五段「はいる」ではなく、文語ラ行四段「いる」を使う。「いら(未然)・いり(連用)・いる(終止)・いる(連体)・いれ(已然)・いれ(命令)」

例14　三過二其門一而不レ入(三たびその門を過ぐるも　いらず)(孟・滕文公上)

「入(他動詞)」は口語ラ行下一段「いれる」ではなく、文語ラ行下二段「いる」を使う。「いれ(未然)・いれ(連用)・いる(終止)・いるる(連体)・○(已然は使用例なし)・いれよ(命令)」

例15　歳悪不レ入(歳あしければ　いれず)(賈誼・論積貯疏)

「うら(恨・怨・憾・慍)む」のマ行四段活用は近世からで(井原西鶴の作品など)、それ以前は上二段活用であったので上二段で読む。「うらみ(未

然)・うらみ(連用)・うらむ(終止)・うらむる(連体)・うらむれ(已然形はほとんど用例がない)・うらみよ(命令形はほとんど用例がない)

例16 人不レ知而不レ慍(ひと知らずしてうらみず)(論・学而)

補説5 「おそ(恐・怖・畏・惧・懼)る」は、下二段活用が普通であるが(「不レ畏=おそれず」)、古くは上二段活用(「不レ畏=おそりず」)、更に古くは四段活用があり(「不レ畏=おそらず」)、平安末期以後に下二段に落ち着いたらしい。「知者不レ惑、仁者不レ憂、勇者不レ懼(知者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は懼れず)」(論・子罕)の建武四年清原家本は古い読み「懼りず」を右傍に、新しい読み「懼れず」を左傍に書く。

「しのぶ」は文語バ行上二段活用であったが、平安時代以降に四段活用が生じた。しかし訓読では依然として上二段で読む。

例17 人皆有二不レ忍レ人之心一(ひと皆ひとに忍びざるの心あり)(孟・公孫丑上)(室町前期までは「忍びざるの」の「の」はつけない)

補説6 「まな(学)ぶ」はふつう文語バ行四段活用で訓読するが、古訓ではバ行上二段活用もある。(論・学而)の建武四年清原家本には「雖レ曰二未レ学一(未だ学びずと曰ふと雖も)」とある。

一の六 サ行変格活用

現代語「する」の意の文語「す」は、「せ(未然)・し(連用)・す(終止)・する(連体)・すれ(已然)・せよ(命令)」と活用するサ行変格活用動詞である。口語でもサ行変格活用で「せ/し/さ(未然)・し(連用)・する(終止)・する(連体)・すれ(已然)・せよ/しろ(命令)」と活用する。単独で使用することもあるが、「祝す」などのように「漢字音語+す」の複合語のなかで使われることが多い。たとえば、(一)口語で五段活用に転じた「愛す・熱す・解す・服す・略す」、(二)口語で上一段活用に転じた「生ず・通ず・報ず・転ず・命ず・信ず・論ず・感ず・禁ず」などがある。特に(一)所属の語はうっかり口語五段活用で読んでしまうことがあるので、注意が必要である。

例18 不レ服二其薬一(その薬をフクせず)(礼・曲礼下)

以下、「漢字音語+す」以外の主な複合語の語形を掲げる。

① 体言+す
あみ(網)す・いへ(家・舎・室・宮)す・さいはひ(福)す・となり(隣)す・みやこ(都)す・もだ(黙・墨)す・やど(宿)す・やまひ(病・疾)す

② 体言+にす
さき(先)にす・ため(為)にす・とも(与)にす・ひとつ(一)にす・ふところ(懐)にす

③ 動詞連用形+す
くみ(与)す・さへずり(囀)す・はしり(走)す・ほり(欲)す(この語形は少なく「ほっす」が普通)・いね(寝)す

④ 形容詞連用形+す
あつく(厚)す・あまねく(普)す・くらく(暗)す・たくましく(逞)す・ただしく(正)す・たやすく(易)す・とく(迅)す・なほく(端・直)す・ひとしく(斉)す・よく(善・淑)す

⑤ 形容動詞連用形+す
あきらか(明・彰・昭・顕)にす・こと(異)にす・つまびらか(詳・審)にす・つぶさ(具・備)にす・ほしいまま(恣)にす・もっぱら(専)にす

⑥ 副詞+にす
ことごとく(尽・卒)にす

⑦ 体言+とす
こと(事)とす・しるし(徴)とす・たから(宝)とす・のり(軌)とす(以上は和語につく例、以下は漢字につく例)、王とす・可とす・臣とす・是とす・宗とす・珍とす

⑧ 形容詞語幹+みす
あまん(甘)ず〔あまみす〕・いやしん(賤)ず〔いやしみす〕・うと(疏)んず〔うとみす〕・おもん(重)ず〔おもみす〕・かろん(軽)ず〔かろみす〕・やすん(安)ず〔やすみす〕・な(無)みす・にく(悪)みす・よ(嘉・好)みす

二 形容詞の活用

二の一

「無し」の訓読未然形は、古くは「無けん」、平安時代末期以後に「無からん」も使用した(現在は両方可)。

例19 不レ及二黄泉一無二相見一也(黄泉に及ばずんば、相見ること無けん)(左・隠元)

例20 西出二陽関一無二故人一(西のかた陽関をいづれば故人無からん)(王維・詩・送元二使安西)

二の二

「多し」の訓読未然形は「無し」と同じ活用形を用いる。

例21 雖二斉不レ許二君庸多矣一(斉 許さずと雖も、君の庸 多けん)(左・昭四)

例22 五日徒衆不レ多、水地不レ利(五に曰く、徒衆 多からず、水地 利あらず)(呉子・料敵)

終止形は訓読は「多し」、和文は「多かり」になる。

例23 好事多レ磨(好事 磨 多し)(琵琶記・三一齣)(「磨」は「魔」とも)

例24 くさぐさのうるはしき貝・石など多かり(土佐日記)

連体形は訓読には「多き+トキ」と「多かる+ベシ」の使い分けがある(和文に「多かる+トキ」型は珍しくないが、訓読ではめったにない)。

例25 時聞二哭声一、多者至二数十人一(時に哭声を聞く、多きときは数十人に至る)(捜神・一二)

例26 故去二此三盗一者、而後粟可レ多也(故に此の三盗を去らば、しかる後 粟 多かるべし)(呂覧・辯土)

例27 罪人極めて多かる中に、一人の小僧あり(今昔物語集)

已然形は訓読のク活用「多ければ」「多ければ(も)」に対して、和文はカリ活用「多かれば」「多かれど(も)」になる。

例28 国多レ財、則遠者来(国に財多ければ、則ち遠き者来たる)(管・牧民)

例29 忘れがたく口惜しきこと多かれど、えつくさず(土佐日記)

形容詞の活用表

種類	語例	未然形 …バ …ム	連用形 …ナル …キ	終止形	連体形 …トキ …ベシ	已然形 …ドモ	命令形
ク活用	無し	く	く	し	き	けれ	かれ
	奈良	く	く	し	き	けれ	かれ
	平安	け(漢) から	く かり	し	き かる	けれ	かれ
	多し・安し・難し	く け(漢) から	く かり	し(和・漢) かり(和)	き(漢) かる (…ベし)	けれ(漢) かれ(和)	かれ かれ
シク活用	正し	しけ	しく しく	し	しき しき	しけれ	しかれ
	奈良			し	しき		
	平安	しから	しかり		しかる		しかれ
	同じ	じく じから (オナジカラン)	じく じかり (オナジクス)	じ	じき (漢) じかる じ・じき(和)	じけれ	
				同A=Aに同じ	与A同=Aと同じ		

二の三　「同じ」の連体形は訓読が「同じき＋体言」になるのに対して、和文では「同じき＋体言」のほかに「同じ＋体言」も使われた。

例30　欲レ貴者人之同心也（貴きを欲するは人の同じき心なり）（孟・告子上）

例31　皇子も同じ所にこもり給ひて…（竹取物語）

三　訓読の助動詞

三の一　「る・らる」は受身に使うのみで、尊敬・自発・可能の用法はまれ。

三の二　使役の「す・さす」は訓読にはほとんど使わず、（をして…）「（未然形）しむ」を使う。

例32　秦令二起賈禁一之（秦　起賈をしてこれを禁ぜしむ）（国策・趙四）

三の三　回想・過去「き・けり」のうち、訓読では「けり」はあっても会話文のなかで使う程度で、頻度は低い。「き」は和文より用途が広い（過去を示す副詞があれば「き」で応じる）。

例33　如レ是我聞、一時仏住二王舎城耆闍崛山中一（かくの如く我れ聞きたまひき、一時　仏　王舎城と耆闍崛山（キシジク）に住みたまひき）（妙法蓮華経）

三の四　完了「つ・ぬ」は、完了の意味では和文も訓読も大差はない。訓読では、平安時代から室町時代では、可能に強意を加えた「可」を訓読するときに「つべし・ぬべし」の形で使うことが多かった。しかし、江戸期以降は単に「べし」と訓読する。

例34　殷因二於夏礼一所二損益一可レ知也（殷は夏礼に因る、損益するところ知んぬべし（知るべし））（論・為政）

三の五　完了「たり・り」は、和文では八二％が「たり」、一八％が「り」、訓読では二八％が「たり」、七二％が「り」。訓読では「り」の使用が優勢である。

例35　謂二之呉孟子一（これを呉孟子と謂へり）（論・述而）

三の六　推量「む・むず・べし」以外は、訓読ではあまり使わない。「ベカラ＋ず」は訓読で頻用する。「べし」には「べけ＋ん」の活用がある。

例36　尚可レ得邪（なほ得べけんや）（史・呂后紀）

三の七　打消「ず」の連体形「ぬ」・已然形「ね」は平安中期以降、訓読での使用はまれである。連体形は「ざる」を頻用し、已然形・命令形には「ざれ」を使う（×「ゆかぬところ」、○「ゆかざるところ」）。「て」に続く場合は「…ずして」となり、和文のように「…ずて……で」にはならない。

三の八　断定「なり・たり」では、訓読は「たり」を多用する。「たり」は平安後期から発達したもので、「…と＋あり」の合成であり、「…という資格がある」という意味合いを帯びる。万能ではないが、「なり」か「たり」かで迷ったら、「にあり」「とあり」に戻してみるとよい。

例37　不二亦君子一乎（また君子ならずや）（論・学而）

「君子にあらずや」はよいが「君子とあらずや」には違和感がある。

例38　君君、臣臣（君、君たり、臣、臣たり）（論・顔淵）

「君、君とあり、臣、臣とあり」はよいが「君、君にあり、臣、臣にあり」には違和感がある。

四　訓読の助詞

四の一　主語の下の「は」は、対比、人物紹介などの場合以外にはつけない。

例39　一将功成万骨枯（一将　功　成って万骨枯る）（曹松・詩・己亥歳）

四の二　訓読には係り結びの「こそ」はない。疑問の係り結び「か」「ぞ」は使われる。「か」「ぞ」に応じて、文末は連体形で結ぶ。

例40　屈子怨何深（屈子　怨み何ぞ深き）（戴叔倫・詩・三閭廟）

四の三　禁止の「（な…）そ」はなく、「なかれ」「ざれ」を使用。

例41　毋レ友二不レ如レ己者一（己に如かざる者を友とするなかれ）（論・子罕）

四の四　希望の「かし・ばや」などはなく、「ねがは（わ）くは」「こふ」などを使用する。

例42　在レ天願作二比翼鳥一（天に在りては　願はくは比翼の鳥となり）（白居易・詩・長恨歌）

補説7　長い発言の引用をする場合、動詞の「曰」「謂」などを「…といふ」というように後で読むのではなく、「いはく」と名詞化して先に読み、その後に引用文を続ける。「いはく」のように名詞化する文法現象を「ク活用」という。現代語の「思わく」「老いらく」などにその痕跡が残る。四段・ラ変活用では未然形に「く」がつき（「いはく」）、その他の動詞型活用では終止形に「らく」を付けた形になる（「いふらく」）。もとは「あく」がついて音韻変化をおこしたものらしい。完了の助動詞「り」などにもつき、「いえり＋あく」→「いへらく」などがある。

五　やまと言葉と訓点語の対立

『源氏物語』や『枕草子』などの「やまと言葉」と平安鎌倉時代の訓読用語の対照表をかかげる（すでに解説した語も含む）。

五の一　助動詞・接続語・助詞の類

ぬ（打消、連体形）	ザル
ね（打消、已然形）	ザレ
まほし・なむ（願望）・ばや	ネガハクハ・コヒネガハクハ・…ホッス

五の二　接続詞

されば	ココヲモテ・コノユヱニ・コレニヨリテ・ユヱニ
さて	シカウシテ
されど・さはあれど・さるは	シカルニ・シカルヲ・シカレドモ

五の三　陳述副詞

など	アニ
え…ず	アヘテ…ズ…コトアタハズ・…コト（ヲ）エズ
つゆ…ず	カツテ・イマダカツテ…ズ
いかで…がな	ネガハクハ・コヒネガハクハ
まさに…むや	イハムヤ
まだ…ず	イマダ…ズ

五の四　程度副詞

いみじく・いたく・いたう・いと	スコブル・ハナハダ
おほかた	ホボ
いとど・いよいよ	マスマス

五の五　情態副詞

かねて	アラカジメ

あるは	アルイハ
いま	イマシ
すべて	コトゴトク(ニ)
かたみに	コモゴモ・タガヒニ
しばし	シバラク
すこし	スコシキ
はやく	スデニ・ツトニ
たまさかに	タマタマ
たはやすく	タヤスク
ただに	マノアタリ
ときどき・ときに	ママ
みだりがはしく	ミダリニ
もしは	モシクハ
やうやう	ヤウヤク
ときどき	ヨリヨリ

五の六　形容動詞語幹

なほざり	イルカセ
しのびやかに・みそかに	ヒソカニ

五の七　形容詞

いかめし	オゴソカ
はやし・とし	スミヤカ
うるはし	イサギヨシ
かしかまし	カマビスシ
いみじ	ハナハダシ

五の八　動詞

あへず・え…ず	アタハズ・エズ
おはす・おはします	イマス・マシマス
あく	ウム
けつ	ケス
くるしがる	クルシブ
きほふ	キソフ
く	キタル
へだつ・さふ	サイギル
たまふ・たまはす	サヅク・アタヘタマフ
ほむ	タタフ
ふたぐ・ふたがる	フサグ・フサガル
まじる・まじらふ	マジハル
まず	マジフ
やすむ	イコフ
むつかる	イキドホル

五の九　名詞

かしら・みぐし	カウベ
ひとびと	トモガラ

六　音読みにするか訓読みにするか

漢文を読み下すときに、日本語として音読みにするのか訓読みにするのか、慣れないうちはその区別がつかないことが少なくない。以下の五項目を原則にすると九割方は区別が出来る(厳密な区別ではなく、例外もある)。

(一)　二字の(ときにはそれ以上の)熟語は音読みする。原則として、湯桶読みや重箱読みはしない。

例1の「旦日」、例3の「文徳」など。なお、「読書」「登山」など、我が国で二字熟語として定着したものは「読書す」「登山す」のように音読みしてもかまわないが、古い訓読ほど「書(ふみ・ショ)を読む」「山に登る」のように開いた読み方をする傾向があった。もちろんそれも間違いではない。それどころか、二字熟語として読んでも、その上の字と下の字の意味関係(「熟語の語構成」といってもよい)を考える癖をつけておくと、読解力が確かなものになる。

(二)　人名・書名・地名・国名などの固有名詞、歴史上の官職名・制度名は音読みする。

例1の「沛公」、例20の「陽関」など。また例15の「歳」は作柄の意で、準制度的なタームとしてとらえ、音読みする。

(三)　「漢字+サ行変格活用」の動詞は音読みする(「位す」のような「訓読み+サ変」は一の六に掲げた一覧を参照)。

例7の「生」、例18の「服」など。

(四)　現在の日本でも一字の名詞で通用するものは音読みする。

例28の「財」、例39の「功」、例42の「天」など。

(五)　右の四項以外は訓読みにする。

例3の「修」「来」、例6の「去」「疎」など。

七　補読

訓読する際に、原文には漢字で表記されていない「こと」「とき」「もの」などの形式名詞を補って読むことがあり、それを補読という。

例43　不レ好レ犯レ上而好レ作レ乱者、未二之有一也(上を犯すことを好まずして乱をなすことを好むものは、未だこれあらざるなり)(論・学而)

例44　父在観二其志一、父没観二其行一(父在(いま)すときはその志を観、父没するときはその行なひを観よ)(論・学而)

例45　如或レ知レ爾、則何以哉(もし爾(なんぢ)を知るものあらば、則ち何を以てせんや)(論・先進)

補説8　手書き写本や木版本印刷などには、形式名詞の「こと」を「丁」(「事」のくずし字)、「とき」を「寸」(「時」字の一部)で書き表した。同様に、接続助詞の「して」を「ノ」(オコト点の「して」を表わす「V」から)、「と(ど)も」を「匕」(ト+モ)、断定の助動詞「なり」を「丶」(「也」字のくずし字)と書き表した。

本稿の「一の六」「五」などに示したリストは、築島裕『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』(東大出版会、一九六三)を参照し、近来の文法論を加味して作成した。また、石塚晴通・小池清治両先生には貴重なご意見を賜った。